

WRC情報はここでチェック。

Internet

**WRC Express**  
e-mail news flash

白熱のWRC/バトルを、リアルタイム携帯チェック!  
SS速報の自動配信をはじめ、WRC情報をどこでもチェック。  
今すぐ携帯電話で [www.subaru-msm.com/ii](http://www.subaru-msm.com/ii) にアクセス!

[ SUBARU モータースポーツマガジン ]  
[ SUBARU グローバル/モータースポーツ ]  
[ SUBARU ワールドラリーチーム ]

[www.subaru-msm.com](http://www.subaru-msm.com)  
[www.subaru-msm.com/global](http://www.subaru-msm.com/global)  
[www.swrt.com](http://www.swrt.com)

[ FIA/ISRCのWRCサイト ] [www.wrc.com](http://www.wrc.com)

TV

\*放映予定は変更になる場合があります。

テレビ東京系6局ネット

特別プログラム「2004WRC 世界ラリー選手権」  
スポーツニュースで全ラウンド結果速報「速生! スポーツTODAY」

[ BS ] BSBテレ 「 WRC2004 」

[ CS ] G+ 「 WRC+ 」

[ CS ] ESPNスポーツアイ 「 WRC世界ラリー選手権 」 「 WRC速報 」

Official Magazine

\*全国のSUBARUディーラーにご用意しています。

**Catch the WRC**  
fast & free paper

SUBARUチームの情報を、ショールームで最速ゲット!  
SUBARUファンなら見逃さない、おなじみWRC全戦速報紙  
「キャッチ・ザWRC」。最高のSUBARUディーラーで無料配布中。

「カートピア」 WRC応援からカーライフ情報まで、SUBARUのある生活を多彩に楽しむ月刊誌。

「BOXER SOUND」 SUBARUモータースポーツ活動のすべてを詳細なデータで解説。ラリーファン必読の年鑑。

SUBARUワールドラリーチームを応援しよう。

SUBARU WRC FAN CLUB

主な特典/オリジナルビデオ、ピンバッジ、ステッカー、会報誌、STIコレクションの割引、各種イベントや  
WRC観戦ツアー優待、SUBARUチームレアグッズプレゼント、メール送信サービス etc.

※詳しくは [www.subaru-sti.co.jp/itempo/index.html](http://www.subaru-sti.co.jp/itempo/index.html) または SUBARU WRCファンクラブ事務局  
〒106-0047 東京都港区南麻布3-19-13 #307 TEL 03-5792-5745 FAX 03-3444-8508 まで。

ラリーの迫力を生で目撃。

2004 全日本ラリー選手権

全13戦から4輪駆動部門のみ紹介

Round 2	ひえつき '04	4 / 24~25	宮崎
Round 3	MSCC東京ラリー2004	5 / 14~16	群馬
Round 4	ザ・京都ラリー2004	5 / 28~30	京都・福井・滋賀
Round 6	ネオステ山岳ラリー '04	6 / 11~13	埼玉・群馬
Round 7	ノースアタックラリー	7 / 2~4	北海道
Round 8	KIRORO Traverse Kamuimindara 2004 Rally in Akaigawa	7 / 16~18	北海道
Round 10	モントレー2004	9 / 24~26	群馬
Round 12	第32回M.C.S.C.ラリー・ハイランドマスターズ2004	10 / 22~24	長野・岐阜

\*データは2004年1月1日時点。ラリーの日程等は変更になる場合があります。



[www.subaru.co.jp](http://www.subaru.co.jp) [www.subaru-sti.co.jp](http://www.subaru-sti.co.jp)

[ SUBARUお客様センター ]  
SUBARUコール 0120-052215 (携帯電話からは 03-3347-2626)  
※土日祝日は各種インフォメーションサービスのみとなります。

SUBARU  
MOTOR SPORT  
CHALLENGE  
2004

SUBARU公認ハンドブック



Think. Feel. Drive. SUBARU



# SUBARU

555 SUBARU ワールドラリーチーム

3人目の新王者を育てた、日本のワールドラリーカーの闘いに期待!



95、96、97年と日本車初のマニファクチャラーズタイトル3連覇を果たしたSUBARUは、95、01、そして03年とドライバーズタイトルでも3人の新チャンピオンを育てあげた。今年には新王者ソルベルグにくわえ、23歳の新鋭ヒルボネンという愉しみな布陣。93年の初勝利から通算39勝を挙げ、10年間一度も未勝利に終わることなくフルシーズンを闘い続けてきたSUBARU。ついに日本でWRCが初開催される2004シーズン、もっとも注目されるチームだ。昨年4勝/マニファクチャラーズ3位



## IMPREZA WRC 2003

走りと安全の世界一に挑む SYMMETRICAL AWD.

\*インプレッサWRC2004は第3戦ラリー・メキシコから登場予定。

インプレッサでドライビング革命をもたらした新世代王者。



WORLD RALLY CHAMPION

Petter Solberg

ペター・ソルベルグ

(コ・ドライバー：フィル・ミルズ)

74年11月18日ノルウェー生  
96年 ラリーデビュー  
98年 ノルウェーチャンピオン  
98年 WRCデビュー/通算60戦  
02年 WRC初優勝(グレートブリテン)/通算5勝  
03年 WRCキプロス、オーストラリア、ツール・ド・コルス、グレートブリテン優勝/ワールドチャンピオン



堂々の年間最多勝で劇的な逆転王者に輝いたソルベルグ。今や母国にラリーブームをまき起こしたノルウェー人初のWRCチャンピオンは、誰からも愛される開放的な性格で“ハリウッド”の異名も取る。絶大な信頼を寄せるインプレッサのコーナリング性能とノルウェー・ラリークロスの経験を活かし、不要なドリフトを抑えタイヤのグリップを活かきる精密な走りは、WRCにドライビング革命をもたらした。今後何回タイトルに輝くか愉しみな、WRC新時代のトップランナーだ。

帝王マキネンの後継者は、弱冠23歳のフライング・フィン。



Mikko Hirvonen

ミック・ヒルボネン

(コ・ドライバー：ヤルモ・レーティネ)

80年7月31日フィンランド生  
98年 ラリーデビュー  
02年 フィンランドF2チャンピオン  
WRCデビュー/通算17戦  
03年 WRCキプロス6位/ランキング15位タイ

引退ラリーを感動の表彰台フィニッシュで飾った鋼鉄のフライング・フィン、トミ・マキネンに認められ、インプレッサのWRカーのシートを受け継いだヒルボネン。コリン・マクレー、リチャード・バーンズ、そしてペター・ソルベルグと3人の新王者を育てたSUBARUが送りこむ注目の新鋭フライング・フィンだ。一昨年はラリー王国フィンランドの国内選手権でクラスチャンピオンを獲得し、昨年はフォードでランキング15位に終わったがフル参戦で各ラリーの経験を積んだ。2004シーズンに向けたテストでは、インプレッサの乗りやすさを高く評価し驚異的な適応能力を見せている。



## CITROEN

シトロエン・トタル

## アスファルトの伏兵、フル参戦でついに初タイトル獲得。

ターマック(舗装路)ラリー王国フランスのシトロエンは、実験的なスポーツ参戦を経て昨年からフル参戦。新鋭ロブや老練サイントスの活躍で初のメーカータイトルに輝いた。クサラはグラベル(未舗装路)でもトップレベルの速を見せており、今年はSUBARUに奪われたドライバーズタイトルにも狙いを定める。昨年4勝/ニュファクチャールズ・チャンピオン



ソルベルグ最大のライバルは、  
氷の頭脳を持つフランスの神童。

Sebastien Loeb  
**セバスチャン・ローブ**  
(コ・ドライバー：ダニエル・エレナ)

74年2月26日フランス生  
95年 ラリーデビュー  
01年 フランスチャンピオン・  
WRCデビュー/通算30戦  
02年 WRC初優勝(ドイツ)/通算4勝  
03年 WRCモンテカルロ、ドイツ、サンレモ優勝  
/ランキング2位

ターマックラリー王国フランスの極端な子ローブは、昨年最終戦までSUBARUのソルベルグと熾烈なタイトル争いを展開。惜しくも敗れたが、グラベルでも好成績を挙げオールラウンドな速さも証明した。若さに似合わない冷静沈着な性格で“アイス・クール”と呼ばれ、キャラクターもソルベルグと対照的な最大のライバルだ。



新世代勢に立ちほだかる、  
百戦錬磨のエル・マタドール。

Carlos Sainz  
**カルロス・サイントス**  
(コ・ドライバー：マルク・マルチ)

62年4月12日スペイン生  
80年 ラリーデビュー  
87,88年 スペインチャンピオン  
87年 WRCデビュー/通算179戦  
90年 WRC初優勝(アクリポリス)/通算25勝  
90, 92年 ワールドチャンピオン  
03年 WRCトルコ優勝/ランキング3位

87年のデビュー以来、WRC最多タイの通算25勝を積み重ね、2度の王座に輝くスペインの英雄サイントス。昨年もトルコで優勝しランキング3位に入るなど、いまだタイトルを狙える実力を秘める。リーダーシップやマシン開発能力も高く、豊富な経験とエル・マタドール(闘牛士)の異名を取る不屈の闘志で、新世代勢に立ちほだかる。

## Xsara WRC



## 307 WRC



## PEUGEOT

マールボロ・ブジョー・トタル

## 無冠に終わったフランスの獅子王。ニューマシンで復権するか。

選手権随一の巨大チームでWRCを席捲してきたブジョーは、昨年、屈辱の無冠に終わった。今年は、コンパクト過ぎて車体構成や操縦安定性に無理を指摘されていた206に代わり、充分な開発期間を経た307を投入し、ブジョー帝国の復権を目指す。昨年4勝/ニュファクチャールズ2位



実力を証明しながら、  
無冠に終わった不運の王者。

Marcus Gronholm  
**マーカス・グロンホルム**  
(コ・ドライバー：ティモ・ラウティアイネ)

68年2月5日フィンランド生  
87年 ラリーデビュー  
89年 WRCデビュー/通算86戦  
00年 WRC初優勝(スウェディッシュ)/通算15勝  
00,02年 WRCチャンピオン  
03年 WRCスウェディッシュ、ニュージーランド、  
アルゼンチン優勝/ランキング6位

13歳の時に亡くなった父の遺志を継ぐかのように、ラリーストを志したグロンホルム。本格参戦は遅かったが、苦勞のすえ2度のタイトルを獲得。昨年は3勝を挙げながらランキング6位に沈んだが、その速さは誰もが認めており、ニューマシン307との相性によっては今年もチャンピオン候補最右翼である事に変わりはない。



ついにトップチームからフル参戦。  
眠れる獅子は覚醒するか。

Freddy Loix  
**フレディ・ロイクス**  
(コ・ドライバー：スベス・スズーツ)

70年11月10日ベルギー生  
90年 ラリーデビュー  
93年 WRCデビュー/通算84戦  
97年 WRCポルトガル2位  
03年 ランキング13位タイ

デビュー以来その才能を高く評価されながら、チーム体制に恵まれずまだWRC未勝利のロイクス。長い不遇の時代を経て、今年ついにトップチームからフル参戦のチャンスを得た。昨年の最終戦ではブジョーから突然のスポーツ参戦で6位に入るなど、適応能力も高い。今年どう化けるか楽しみなダークホースだ。

## 世界の頂点を争う、究極のAWDマシン“ワールドラリーカー”

AWD=All Wheel Drive (4輪駆動)



## ワールドラリーカーとは?

WRカーは97年からWRCに導入された車両規格。それまで主流だった**グループA**は、ベースとなる高性能AWDターボの市販車を1年で2500台生産する必要があった。それに対し**WRカー**のベース市販車は、同一系車種も含めて1年で25000台量産した大衆向けのシリーズを使うことができ、ターボやAWD/ワートレートを“後付け”する事が許されている。それにより、1年に2500台も高性能AWDターボ車を生産・販売できないメーカーも、手持ちの大衆向け量産車をベースにWRCに参加できるようになった。市販車と同じ基本構造で闘い続けるインプレッサのよさなWRカーは稀有な存在である。

## WRカーの素性を決めるAWD/ワートレイン

WRカー=究極のAWDマシンであり、AWD/ワートレインのレイアウトがWRカーの基本性能を決める。SUBARUは、低重心な縦置き水平対向エンジンを横に左右対称にレイアウトされた、シンプルで合理的な**SYMMETRICAL AWD**をWRC初参戦時から一貫して採用。ジャンプ中での車体姿勢が崩れにくいと評される、類まれな重量/慣性が最大のアドバンテージとなる。タイトルチームで興味深いのはフォード・フォーカスだ。エンジンは一般的な縦置き直列4気筒ながら、SUBARUのように縦置きミッションをホイールベース内に収め前後重量配分を改善している。重心の高い直列エンジンによる不安定な操縦性や、横置きエンジンから経路がミシヨンの駆動ロスなどは否めないが、昨年までのブジョーも同様のレイアウトを採用するなど実績もある。シトロエン/クサラや三菱/ランサーなどは、横置きエンジンとミッションを前輪の間に置いた、ごく一般的なファミリーカーのレイアウトがベースとなる。重量複雑な構造もあってフロントビームになりがちだが、エンジン/パワーや電子制御の開発努力でトップレベルの性能を発揮している。



写真は市販インプレッサのAWD/ワートレイン。WRカーと同じ基本構造の**SYMMETRICAL AWD**が、量産車のランジ/インプレッサ、フォアスターにも一貫して採用されている。このような例は世界的にも稀有。

## AWDマシンの性能を引き出す周辺技術の進化

- 駆動系  
4つのタイヤに駆動力を最適な配分するために、SUBARUはAWDの3つのデフを電子制御化した**トリアクティブデフ**をいち早く開発。現在はそれがWRCのスタンダードとなっており、デフの制御がWRカーの走行性能に大きな影響を与えている。
- 排気管  
各チームともステアリング操作に集中できるセミATを導入。SUBARUの**スポーティブフット**は、スロットルコントロールとあわせてシフトチェンジも**フライバイワイヤ**方式で行ない、ドライバーの操作を電氣信号化することでより精密なコントロールを追求している。
- 足回り  
SUBARUはサスペンションの減衰力を電子制御する**アクティブダンパー**を開発し、ベース車の高剛性ロングスローク・サスペンションの選を越えない路面追従性をさらに高めている。ライバルチームでは、重心の高い直列エンジンによるコーナリング中の車体の傾きを抑える**ブジョー**やシトロエンの**アクティブアンチロールバー**や、サスペンションストロークをベース車より大幅に拡大する**トローリングアーム・ストローク**などが興味深い。
- エンジン  
直径34mmの**エアリストラクター**でエンジンの吸気量とパワーを制限されるWRカーは、レスポンスや低中速トルクなどエンジン特性のチューンが重視される。わざと排気管で不正爆発を起こさせてターボの回転数を保ち、スロットルレスポンスを高める**アンチラックシステム(ミスファイアリングシステム)**が有名だが、排気パイプを拡大した空燃比制御によるものや、吸気を一時的にタンクに溜めておいて使う方式も各チームで試されている。
- 空力特性  
現代のハイブリッドラリーでは空力特性も重視され、リヤウイングに整流板を設けダウンフォースを向上する**スプリッターウイング**もトントンとなった。インプレッサはベース市販車の段階からWRCのフィードバックを活かした空力ボディを開発。ミッドシップランサーの特異なリヤウイング形状も効果のひとつ目される。

## 多彩なコースに対応するタイヤと、安全性を追求したボディ

- タイヤ  
WRカーのタイヤには、ラフロード用の**グラベルタイヤ**、大径ホイールと組み合わせた舗装路用の**ターマックタイヤ**、氷雪路でのグリップを稼ぐため針目付きの**ハードコート**を付いた**スノータイヤ**、泥濘路を走るため**グラベルタイヤ**よりさらに溝を大きくした**マッドタイヤ**などがある。さらに、タイヤの中に特殊なゴムスエを入れておくことで、悪路でバグしても走り続けられる**ムスタフタイヤ**や穴が空いた。モンテカルロのような路面変化が激しいラリーなど、タイヤ選択の勝負を分ける事も多い。
- 安全が  
原価絶賛から転落することもあるラリーカーだけに、ロールオーバーや液化器など安全対策も徹底され、WRカーでは重大な事故はほとんど発生していない。またルーフベントレーターやエアコンの試験の導入など、ドライバーのコンディション維持も研究が進んでいる。

\*データは2004年1月1日時点。各チームの体制、ドライバー、マシン等に変更になる場合があります。 7



# FORD


フォード・モーターカンパニー

## Focus RS WRC



### 新世代ラリーストの活躍を生んだWRCの古豪。

1973年から参戦を続ける名門フォード。近年は若手の育成にも熱心で、昨年は、新世代ラリーストの一翼をになうエースのマルティンが2勝を挙げた。かつてインプレッサも手がけたクリスチャン・ロリオによりフォーカスは着実な進化を遂げており、来年は79年以外のタイトルも期待できそうだ。昨年2勝/マニファクチャラーズ4位

	ついに初勝利を挙げた、旧共産圏の新世代ラリースト。	75年11月10日エストニア生 94年 ラリーデビュー 97年 WRCデビュー/通算57戦 97, 98年 エストニアチャンピオン 03年 WRC初優勝(アクロポリス)/通算2勝 03年 WRCアクロポリス、フィンランド優勝 /ランキング5位
	<b>Markko Martin</b> <b>マルコ・マルティン</b> (コドライバー: マイケル・パーク)	
マルティンは、旧共産圏のエストニアから世界に挑む異色の新世代ラリースト。昨年は熟成の進んだマシンとの相性もよく、堂々の2勝を挙げてチャンピオン候補の仲間入りを果たした。SUBARUのソルベルグ、シトロエンのロープとの新世代ラリーストによる三つ巴のタイトル争いから、今年も目が離せない。		

	初の表彰台を経験したベルギーのシンデレラボーイ。	80年11月18日ベルギー生 92年 ラリーデビュー 02年 WRCデビュー/通算19戦 03年 WRCトルコ、ツールド・コルス3位/ ランキング8位タイ
	<b>Francois Duval</b> <b>フランソワ・デュバル</b> (コドライバー: ステファン・プレボ)	
ラリーストの父を持ち、4才の頃からラリーに親しむベルギーの新鋭デュバル。昨年はフォードからWRカーでフル参戦という大抜擢を受け、トルコとツールド・コルスで3位に。ツールド・コルスでは一時トップを快走した。昨年チームメイトだったSUBARUのヒルボネとの、23歳同士の新鋭対決にも注目したい。		

### ライバルがいるから進化する。 WRCにドライビング革命をもたらした、 新世代ラリースト三つ巴のタイトル争い。



マルコ・マルティン  
ベター・ソルベルグ  
セバスチャン・ロープ

ユハ・カンクネンvsカロス・サインツ、そしてコリン・マクレーvsトミ・マキネン……ラリーの世界でも、数々の伝説的なライバル関係が闘いの歴史を作ってきた。そして現在のWRCを席捲するのは、SUBARUのベター・ソルベルグ(ノルウェー)、シトロエンのセバスチャン・ロープ(フランス)、フォードのマルコ・マルティン(エストニア)という3人の新世代ラリーストだ。WRCは伝統的に、派手なドリフト走法を雷道で鍛えた“フライング・フィン”と呼ばれるフィンランド勢が強かったが、新世代ラリースト3人の出身国はそれぞれ異なる。特にソルベルグとマルティンは、母国初のWRCトップドライバーだ。彼らが今までのドライバーと大きく異なるのは、必要以上のドリフトを抑えてタイヤのグリップを活かす、極めて精密なコーナリング。かつてのグループBのような大パワーにものを言わせた派手なドリフトではなく、AWDシステムやサスペンションなどマシンの総合力でコンマ1秒を争う。現代のハイスピードラリーが生み出した究極のドライビングスタイルと言えるだろう。いまはSUBARUのソルベルグが初タイトル獲得で一步リードした感があるが、3人ともいつチャンピオンになってもおかしくない逸材だけに、今年も三つ巴のタイトル争いから目が離せない。

# MITSUBISHI


ミツビシモータース・モータースポーツ


## Lancer WRC



### 待望の復活! ふたたび世界の頂点を目指す永遠のライバル。

かつてインプレッサとともにWRCを席捲した、好敵手ランサーが帰ってきた。ミツビシは一昨年の未勝利を受け、昨年はマシン開発に専念。満を持しての再デビューとなる。今年は、ターマック(舗装路)最速の男と呼ばれるパニッツィをエースに、若手ドライバーも積極的に起用。ふたたび世界の頂点を目指す日本のライバルの健闘を祈りたい。

	ダウンヒルの魔術師、オールラウンダーを目指しフル参戦。	65年9月19日フランス生 87年 ラリーデビュー 90年 WRCデビュー/通算56戦 96, 97年 フランスチャンピオン 00年 WRC初優勝(フランス)/通算7勝 03年 WRCカタルニア優勝/ランキング10位
	<b>Gilles Panizzi</b> <b>ジル・パニッツィ</b> (コドライバー: エルバ・パニッツィ)	
ターマック最速の名を欲しいままにしてきた奇才パニッツィは、昨年もブジョーでターマックラリーに重点的に参戦。サンレモではシトロエンのロープに、ツールド・コルスではSUBARUのソルベルグに連覇を阻まれたものの、カタルニアでは2年連続優勝を飾った。今年は新天地でフル参戦。タイトルを狙えるオールラウンダーを目指す。		

	ニューマシンとともに成長するフィンランドのオールラウンダー。	78年1月15日フィンランド生 97年 ラリーデビュー 02年 PCWRCランキング2位 03年 WRCデビュー/通算3戦
	<b>Kristian Sohlberg</b> <b>クリスチャン・ショーベリ</b> (コドライバー: カイ・リンドストローム)	
昨年は旧型ランサーWRCでスノー、グラベル、ターマックと3種類のラリーを経験し、ニュージーランドでは一時ポイント圏内を走ったショーベリ。オールラウンドな走りでもマシン開発にも深く関わる。今年は、引退したフィンランドの大先輩トミ・マキネンのコドライバーだったリンドストロームを迎え、まずは第2戦スウェディッシュに出場する。		

	イタリアの若きランサー使い、WRカーを乗りこなせるか。	73年1月3日イタリア生 94年 ラリーデビュー 02年 JWRCランキング9位 04年 WRCデビュー
	<b>Gianluigi Galli</b> <b>ジャンルイジ・ガリ</b> (コドライバー: キド・ドゥアモレー)	
グループNランサーに乗ってWRCやイタリア選手権で経験を積み、クラス優勝の経験もあるガリ。WRカーで参戦のチャンスを得た今年は、まずは開幕戦モンテカルロに登場。以降はチームメイトのショーベリ、ソラと同様に、イベントによってWRCまたはPCWRCに出場する。		

	パニッツィも一目置くスペインの新鋭ダウンヒラー。	75年1月3日スペイン生 96年 ラリーデビュー 02年 JWRCチャンピオン 03年 PCWRCランキング5位 04年 WRCデビュー
	<b>Daniel Sola</b> <b>ダニエル・ソラ</b> (コドライバー: アレックス・ロマーニバルセルス)	
ターマックラリーを得意とするスペインのソラは、昨年のPCWRCにランサーで参戦し、ドイツラリーでは脅威的な速さで優勝。一昨年は小排気量のJWRCのタイトルも取っている。ターマック最速の男パニッツィと同じチームで、多くを学ぶ成長の年となりそうだ。		



# SUBARU "Gr.N" PROJECT

より市販車に近い「もうひとつのWRC」で、インプレッサの基本性能を証明。

世界の頂点を争うWRCと併催の形で、今年は全7戦が行なわれるPCWRC [プロダクションカー世界ラリー選手権]。より市販車に近いグループNマシンで闘うこのシリーズにも、SUBARUは積極的に参戦している。昨年は注目の日本最速ラリースト新井敏弘を擁し、インプレッサWRX STiがランキング1、2、3位を独占。今年は各国のラリーストからインプレッサでの参戦希望が増加するなか、支援体制をさらに強化し、日本、イギリス、イタリアの3チームをメインに参戦。好敵手ミツビシ・ランサーも雪辱を期しており、目が離せないシーズンとなりそうだ。



日、英、伊の3チームをメインに体制強化! これがSUBARUの2004グループNプロジェクトだ。

 **SUBARU TEAM Arai**  
[SUBARUチームアライ]

  
新井敏弘

昨年最多の3勝を挙げた新井敏弘は自らチームを結成。有効ポイント制に阻まれ同じインプレッサのマーチン・ロウにタイトルを譲った雪辱を誓う。ランサーで参戦する叔田原文雄との全日本チャンピオン同士の対決も注目だ。

 **R.E.D. WORLD RALLY TEAM**  
[R.E.D.ワールドラリーチーム]

  
アリスター・マクレイ

英国からはR.E.D.ワールドラリーチームが、元英国チャンプでWRCでの経験も豊富なアリスター・マクレイを投入。かつてSUBARUで最年少王者に輝いた“世界最速の男”コリン・マクレイの実弟だけに期待が集まる。

 **TOP RUN**  
[トップラン]

  
マールコス・リガト   マーク・ヒギンズ   ファビオ・フリジエロ

イタリアの名門トップラン・レーシングも、今年からインプレッサにスイッチ。マールコス・リガト、マーク・ヒギンズ、ファビオ・フリジエロの3人体制でタイトルを狙う。

**Others**

この3チームの他にも、日本のシムスからはニール・マックシェアが、ベルギーのミルブルック・ワールドラリーチームからはヨアキム・ロマンが、イギリスのオーテック・モータースポーツからはネッサン・サレアル・アティヤーがインプレッサで参戦予定。宿敵ランサー勢も、2003全日本チャンピオンの叔田原文雄やWRCチームの若手3名など大挙エントリー。マレーシアのメーカー、プロトンもあどけないポテンシャルを持っており、激戦が予想される。

## 2004 PCWRC

[プロダクションカー世界ラリー選手権]

Round 1	スウェディッシュ・ラリー	2/6-8
Round 2	ラリー・メキシコ	3/12-14
Round 3	ラリー・ニュージーランド	4/16-18
Round 4	ラリー・アルゼンチン	7/16-18
Round 5	ラリー・ドイツ	8/20-22
Round 6	ツール・ド・コルス	10/15-17
Round 7	ラリー・オーストラリア	11/12-14

※WRCイベントと併催で計7戦が行われます。



### PCWRCポイント規定

各戦ごとに、1、2、3、4、5、6、7、8位のドライバーにそれぞれ10、8、6、5、4、3、2、1点の選手権ポイントが与えられ、その年間合計でチャンピオンを決定する。ただし年間7戦のうち各ドライバーが任意に選択した6戦分のポイントのみが有効となる。



# 2004 FIA World Rally Championship

## ラリーの舞台は“スペシャルステージ”

灼熱のラフロード、断崖絶壁のワインディング、氷点下のスノーロード。地球のあらゆる道を舞台に、全16戦で行なわれる2004FIA世界ラリー選手権“WRC”。その闘いの舞台は、公道を閉鎖して造られた20ヶ所前後のSS（スペシャルステージ）です。このSSを各車順番にアタックし、SSのスタート/ゴール地点にあるTC（タイムコントロール）でタイムを計測。タイムの合計で各ラリーの総合順位が決まります。ラリーによっては、並走するコースで2台が同時にタイムアタックするスーパーSS（スーパースペシャルステージ）も設定されます。



スーパースペシャルステージ

## 3日間におよぶラリー・スケジュール

ひとつのラリーで合計400km前後に及ぶSSは、通常Leg（レグ）1からLeg3まで3日間に振り分けられます。最近ではラリーのヘッドクォーター（大会本部）があるホストタウン（開催都市）を中心に、3日間のコースを3つ葉のクローバーのように配置した合理的なコース設定が主流。同じSSを2度3度と再走するリピートステージもあります。闘いの場となる各SSを結ぶロードセクションは一般公道なので、WRカーもその国の交通規則を守る必要があります。ロードセクションにはマシンの修理ができるサービスパークが設けられますが、場所は限定され、サービスパーク以外での修理は乗員みずから行なわねばなりません。また修理などで時間を取られ各SSのタイムコントロールに到着が遅れると、ペナルティでタイムが加算されたり失格になる事もあります。



## WRC用語辞典

### WRCってなんなの？

**World Rally Championship（世界ラリー選手権）**の略。ラリーの頂点WRCは、レースの頂点F1と並ぶ、FIA（国際自動車連盟）が認定する世界選手権です。今年は全16戦が予定され、その年間成績でマニファクチャラー（メーカー）とドライバーのワールドチャンピオンが決まります。F1と違いは、あくまで市販車が主役。公道が舞台であること。自動車メーカーに与えられる唯一の世界タイトルでもあるのです。

### FIAの正体は？

FIAはFederation Internationale de l'Automobile（国際自動車連盟）の略。設立100周年を迎えるFIAは、フランスに本部があり現在の会長はマックス・モスレーです。モータースポーツにおいては、WRC、F1といった世界選手権を運営。世界各国から加盟する自動車連盟（日本はJAF＝日本自動車連盟）が、地域選手権（例は全日本ラリー選手権）を運営します。FIA内部には、各ラリーのオーガナイザー（主催者）、FIAメンバー（チーム代表者）などで構成されるラリーコミッション（ラリー委員会）があり、ラリーの規定（レギュレーション）や運営、開催スケジュールなどを計議、FIAの最高決定機関であるワールドカウンシル（世界評議会）に提出し承認を受けます。

### ホモロゲーションとかレギュレーションとかってなんなの？

ホモロゲーションは、いわゆる認証のこと。WRCに限らず国際規格のモータースポーツへの参戦は、FIAが定めた規定（レギュレーション）を満たしホモロゲーションを受けた車両しか使用できません。WRCカーに新メカニズムを導入する場合、ホモロゲーションを得られるかどうかは技術者達の悩みの種なのです。

### ワークスとプライベートの違いは？

ワークスは「メーカー直系」という意味。SUBARUの場合はSWRT（SUBARU World Rally Team）がワークスチームで、SUBARUのモータースポーツ活動を統括する日本のSTI（シバルトネカインターナショナル）と、英国有数のモータースポーツ・ファクトリーであるプロドライブが協力を運営しています。それ以外のチームをプライベートチームと呼びますが、プライベートにもいろいろあって、ほとんど自費で参加するチームから、メーカーからサポートを受けるサテライトチームまで様々。どちらかというと、より市販車に近いグループN車両で競うプロダクションカー・世界ラリー選手権（PCWRC）で走ることが多く、SUBARUは今年、日本のSUBARUチームアライ、英国のR.E.D.ワールドラリーチーム、イタリアのトップランなどをサテライトチームとしてサポートしています。

## レッキとベースノート

同じコースを周回し続けるレースと違い、ラリーの舞台は多種多様な路面や気候風土の一般公道。ラリー前にレッキ（事前走行）を行ない、コース状況を調べておく必要があります。この仕事の中心となるのがコ・ドライバーで、コース状況をベースノートに記入し、ラリー本番では助手席からドライバーにコース状況や走り方を指示します。またラリー直前にSSを走って路面状況を偵察するクラヘルクルと呼ばれるスタッフが居ますが、その活動は今年は大幅に制限される予定です。



ベースノート

## 年間ポイントレギュレーション

### ドライバーズ・タイトル ポイント換算表

総合順位	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位
獲得ポイント	10	8	6	5	4	3	2	1

ドライバーには各ラリーごとに総合順位に応じて上記の選手権ポイントが与えられ、その年間合計でドライバーズ・チャンピオンが決定します。

### マニファクチャラーズ・タイトル ポイント計算法

マニファクチャラーズ・タイトルの対象となる選手権登録したフル参戦ワークスチームは、各戦ごとに2名のドライバーをワークス登録できます。うち1名はあらかじめ年間登録する必要がありますが、もう1名は各戦ごとに選択できます。このワークス登録ドライバーが獲得した選手権ポイントの年間合計で、マニファクチャラーズ・チャンピオンが決まります。ワークス登録されていないドライバーの順位はマニファクチャラーズ・ポイント算出上は除外され、下位ドライバーを繰り上げて計算します。

### シェイクダウンって何するの？

ラリーカーやドライバーの紹介も兼ねたセレモニアルスタートとともに、ラリー前日に行なわれる公式テストがシェイクダウン。ワークスチームは参加が義務づけられています。最近では現場での事前テストが厳しく制限されている事もあり、シェイクダウンが新型マシンのお披露目の場となることも。マシンがレギュレーションを満たしているかを検査するラリー前日の車検とともに、多くのギャラリー（観客）を集めるイベントです。

### ゼロカーってどういうクルマ？

ラリー本番前にコースの安全を確認するために、主催者が走らせる試走車の事。ラリー終了後に走るのはスーパーカーと呼ばれる。試走車とは、いわばラリーカーとしてチューンされ、往年の名ドライバーがドライブすることも。沿道で観戦するギャラリーにとってはラリー開始の合図にもなり、ゼッケンや付け回転灯を回したゼロカーが来ること、いよいよ盛り上がるわけです。

### バルクフェルメは何するの？

何もしないでいい所です。各Legの終了後、つまり一日のラリーが終わってレストネット（休息）に入った時、各マシンはバルクフェルメに集結・保管されます。この8～10時間の保管中は、整備はおろか許可なくマシンに

触れることもできません。ラリーのスムーズな進行のためにLeg中に各マシンを一旦集結させる事がありますが、これはリグループと呼ばれます。

### リバースオーダーってなんのため？

各ラリーのスタート順は、初日のLeg1は前戦終了時のドライバーズランキング順となります。ただしLeg2以降は、せがぐ前Legで上位に入ったドライバーが早いスタート順のせいでコースの砂利かき役によって不利にならないように、前Legの15位～1位が～15番目にスタートします。つまり、スタート順が逆順（リバースオーダー）になるというわけですね。

### ラリーコンピュータってどういうモノ？

ラリーカーに搭載されたコ・ドライバー用の計算機装置です。コースの距離、所用時間、平均/最高速度、燃費などが車載カメラに表示され、ベースノートとともにドライバーへの指示の参考にされます。

### モーターホームって家ですか？

ドライバーの休憩、食事の供給、ミーティングなどを行なうための車両です。現在は大型の2階建てバスやトレーラーが持ち込まれ、SUBARUワールドラリーチームのモーターホームでは、取材や記者会見などを行なうフルームやコピー室まで用意されています。ちなみに、ラリーカーを整備するために工具やパーツを満載したトレーラー、トラック等はサービスカーと呼ばれています。



Round  
**1**



**アイスバーンきらめく、伝説のダウンヒル。**

氷雪のチュニ峠から陽光の地中海へ、激変する路面を駆け抜ける。1911年から幾多の名勝負を生んできた伝統と栄光のモンテカルロは、まさにダウンヒルの世界一決定戦だ。

**第72回  
ラリー・モンテカルロ [モナコ]  
Rallye Automobile Monte Carlo  
1/23-25**

【昨年の順位】	4位 M・マルティン(フォード)
優勝 S・ロープ(シトロエン)	5位 R・バーンズ(プジョー)
2位 C・マクレー(シトロエン)	6位 C・ロペル(プジョー)
3位 C・サインツ(シトロエン)	7位 F・デュバル(フォード)
	8位 A・シュバルツ(ヒュンダイ)

【過去の勝者】  
02 T・マキネン(SUBARU) 01 T・マキネン(ミツビシ) 00 T・マキネン(ミツビシ)  
99 T・マキネン(ミツビシ) 98 C・サインツ(トヨタ) 97 P・リッチイ(フォード)  
96 P・ベルナルデニ(フォード) 95 C・サインツ(SUBARU) 94 F・テグワール(フォード)  
93 D・オリオール(トヨタ) \*96年はWRCイベントではない。

Round  
**2**



**零下20℃の雪原を行く  
時速200kmの闘い。**

零下20℃のツンドラの雪原を、WRCでもトップクラスの超高速で駆けぬげる。北欧系ドライバーが半世紀以上も勝利を独占する氷雪の牙城だ。

**第52回  
スウェディッシュ・ラリー [スウェーデン]  
Uddeholm Swedish Rally  
2/6-8** **PCWRC 併催**

【昨年の順位】	4位 M・マルティン(フォード)
優勝 M・グロホルム(プジョー)	5位 C・マクレー(シトロエン)
2位 T・マキネン(SUBARU)	6位 P・ソルベルグ(SUBARU)
3位 R・バーンズ(プジョー)	8位 T・ガルドマイスター(シュコダ)

【過去の勝者】  
02 M・グロホルム(プジョー) 01 H・ロビンソン(プジョー) 00 M・グロホルム(プジョー)  
99 T・マキネン(ミツビシ) 98 T・マキネン(ミツビシ) 97 K・エリクソン(SUBARU)  
96 T・マキネン(ミツビシ) 95 K・エリクソン(ミツビシ) 94 T・ホストロム(トヨタ)  
93 M・ヨンソン(トヨタ) \*94年はWRCイベントではない。

Round  
**3**



**WRC初開催、ラテンの血が騒ぐ中米決戦。**

日本とともにWRC初開催となるメキシコは、川渡りでの派手なウォータースプラッシュなど見所も多いラフロードだ。注目の新型インプレッサWRC2004の投入も予定されている。

**第19回  
ラリー・メキシコ  
Corona Rally Mexico  
3/12-14** **PCWRC 併催**

【昨年の順位】 *WRC昇格は04年から。	4位 A・モンタルト(SUBARU)
優勝 M・リガ(ミツビシ)	5位 A・ヒメンデス(ミツビシ)
2位 R・フェレイロス(ミツビシ)	6位 P・カニョ(ミツビシ)
3位 J・クワリング(ミツビシ)	7位 O・レイエ(フォルクスワーゲン)
	8位 W・グーベルマン(SUBARU)

【過去の勝者】  
02 H・ロビンソン(プジョー) 01 R・フェレイロス(トヨタ) 00 D・ゴア(ミツビシ)  
99 G・マリン(ミツビシ) 98 C・サカド(ニッサン) 97 R・ホール(ミツビシ)  
94 A・ゾラ(ミツビシ) 93 G・スバロ(ミツビシ)  
\*WRC昇格は04年から。

Round  
**4**



**フラットな高速ダートで  
豪快ドリフト。**

“アイアンロード”と呼ばれる堅くフラットな高速ダートが舞台。マシンへの負担も少なく、南半球の広大な牧草地帯のなか豪快なドリフトを駆使できる、スポーツ性の高いコースだ。

**第34回  
ラリー・ニュージーランド  
Propecia Rally New Zealand  
4/16-18** **PCWRC 併催**

【昨年の順位】	4位 S・ロープ(シトロエン)
優勝 M・グロホルム(プジョー)	5位 T・ガルドマイスター(シュコダ)
2位 R・バーンズ(プジョー)	6位 A・マクレー(ミツビシ)
3位 P・ソルベルグ(SUBARU)	7位 T・マキネン(SUBARU)
	8位 D・オリオール(シュコダ)

【過去の勝者】  
02 M・グロホルム(プジョー) 01 R・バーンズ(SUBARU) 00 M・グロホルム(プジョー)  
99 T・マキネン(ミツビシ) 98 C・サインツ(トヨタ) 97 K・エリクソン(SUBARU)  
96 R・バーンズ(プジョー) 95 C・マクレー(SUBARU) 94 C・マクレー(SUBARU)  
93 C・マクレー(SUBARU) \*96年はWRCイベントではない。

地中海最奥の孤島で  
ラフロード・バトルロイヤル。

イスラエルにほど近い地中海の孤島キプロス。ガレ場のようなラフロードはマシンに厳しく、平均速度は低い。昨年は7台のフォーカスマシンしか生き残れない厳しい闘いとなった。

**第32回  
キプロス・ラリー  
Cyprus Rally  
5/14-16**

【昨年の順位】	4位 C・マクレー(シトロエン)
優勝 P・ソルベルグ(SUBARU)	5位 C・サインツ(シトロエン)
2位 H・ロビンソン(プジョー)	6位 M・ヒルボネン(フォード)
3位 S・ロープ(シトロエン)	7位 A・シュバルツ(ヒュンダイ)
	8位 A・キョレ(フォード)

【過去の勝者】  
02 M・グロホルム(プジョー) 01 C・マクレー(フォード) 00 C・サインツ(フォード)  
99 P・リッチイ(SUBARU) 98 A・ナリス(SUBARU)  
97 C・ロウウィック(SUBARU) 96 A・シュルツ(トヨタ) 95 “リゲータ”(ランチア)  
94 A・フィオリオ(ランチア) 93 A・フィオリオ(ランチア) \*WRC昇格は00年から。

半世紀を超えて立ちはだかる、  
ギリシア神話の悪路。

散乱する大理石に灼熱の太陽が照りつける。ギリシア神話の隘路を行く。「アクロを制するものは世界を制す」と言われた難関は、インプレッサが94年に初勝利を挙げた神託の地だ。

**第51回  
アクロポリス・ラリー [ギリシア]  
Acropolis Rally  
6/4-6**

【昨年の順位】	4位 R・バーンズ(プジョー)
優勝 M・マルティン(フォード)	5位 T・マキネン(SUBARU)
2位 C・サインツ(シトロエン)	6位 H・ロビンソン(プジョー)
3位 P・ソルベルグ(SUBARU)	7位 G・バニョ(プジョー)
	8位 C・マクレー(シトロエン)

【過去の勝者】  
02 C・マクレー(フォード) 01 C・マクレー(フォード) 00 C・マクレー(フォード)  
99 R・バーンズ(SUBARU) 98 C・マクレー(SUBARU) 97 C・サインツ(フォード)  
96 C・マクレー(SUBARU) 95 A・ホリス(ランチア) 94 C・サインツ(SUBARU)  
93 M・ヒアジョン(ランチア) \*95年はWRCイベントではない。

七色のラフロードを攻める  
サバイバルコース。

昨年WRC初開催のトルコは、半数以上がリタイアという大波乱のラリーとなった。険しい路面は天候や標高差による変化も激しく、コース経験の少ない各チームを悩ませる。

**第5回  
ラリー・トルコ  
Rally of Turkey  
6/25-27**

【昨年の順位】	4位 C・マクレー(シトロエン)
優勝 C・サインツ(シトロエン)	5位 G・バニョ(プジョー)
2位 R・バーンズ(プジョー)	6位 M・マルティン(フォード)
3位 F・デュバル(フォード)	7位 T・ガルドマイスター(シュコダ)
	8位 T・マキネン(SUBARU)

【過去の勝者】  
02 E・カザン(SUBARU) 01 S・ヤシ(トヨタ)  
99 J・バニョ(SUBARU)  
\*WRC昇格は03年から。

砂塵の荒野を行く、  
スリリングな高原ルート。

路面の岩を隠す砂塵が積み、巻き上げられて視界を奪う。随所に待ちうける川渡りの難関。南米の乾いた高原を行くラリーでは、わずかなミスも許されない。

**第24回  
ラリー・アルゼンチン  
Rally Argentina  
7/16-18** **PCWRC 併催**

【昨年の順位】	4位 H・ロビンソン(プジョー)
優勝 M・グロホルム(プジョー)	5位 P・ソルベルグ(SUBARU)
2位 C・サインツ(シトロエン)	6位 D・オリオール(シュコダ)
3位 R・バーンズ(プジョー)	7位 T・ガルドマイスター(シュコダ)
	8位 F・デュバル(フォード)

【過去の勝者】  
02 C・サインツ(フォード) 01 C・マクレー(フォード) 00 R・バーンズ(SUBARU)  
99 J・カンクネン(SUBARU) 98 T・マキネン(ミツビシ) 97 T・マキネン(ミツビシ)  
96 T・マキネン(ミツビシ) 95 J・レカレダ(ランチア) 94 D・オリオール(トヨタ)  
93 J・カンクネン(トヨタ) 95年はWRCイベントではない。



Round

9



第54回

ラリー・フィンランド

Neste Rally Finland

8/6-8

### 北欧の森と湖を飛び 超高速ラリー。

"フライング・フィン" 達の故郷の国民的イベントは、かつて1000湖ラリーの名で知られていた。森と湖をぬぐう硬くうねった道は、200km/hをはるかに超えたマシンを数十メートルもジャンプさせる。

[昨年の順位] 4位 C・サインツ(シトロエン)  
優勝 M・マルティン(フォード) 5位 S・ロープ(シトロエン)  
2位 P・ソルベルグ(SUBARU) 6位 T・マキネン(SUBARU)  
3位 R・バーンズ(アージュ) 8位 S・リンドホルム(アージュ)

[過去の勝者]

02 M・グロンホルム(アージュ) 01 M・グロンホルム(アージュ) 00 M・グロンホルム(アージュ)  
99 J・カンクネン(SUBARU) 98 T・マキネン(ミツビシ) 97 T・マキネン(ミツビシ)  
96 T・マキネン(ミツビシ) 95 T・マキネン(ミツビシ) 94 T・マキネン(ミツビシ)  
93 J・カンクネン(トヨタ) \*95年はWRCイベントではない。

Round

10



第22回

ラリー・ドイツ

ADAC Rallye Deutschland

8/20-22

PCWRC 併催

### 多彩なコースがマシンを試す、 今季初の本格ターマック。

広大な軍事演習場から、ぶどう畑をうつつら折りまで多彩なコース。今年最初の本格ターマック(舗装路)だけに、各マシンのワインディング性能をはかる試金石となるだろう。

[昨年の順位] 4位 C・マクレ(シトロエン)  
優勝 S・ロープ(シトロエン) 5位 M・マルティン(フォード)  
2位 M・グロンホルム(アージュ) 6位 C・サインツ(シトロエン)  
3位 R・バーンズ(アージュ) 7位 J・ペナルスキー(ルノー)  
8位 P・ソルベルグ(SUBARU)

[過去の勝者]

02 S・ロープ(シトロエン) 01 P・パウルスキー(シトロエン) 00 トルンドスト(トヨタ)  
99 A・クレマー(SUBARU) 98 M・カール(トヨタ) 97 D・テビング(フォード)  
96 D・テビング(フォード) 95 E・バートン(トヨタ) 94 D・テビング(フォード)  
93 P・スニージャーズ(フォード) \*WRC昇格は'02年から。

Round

11



第4回

ラリー・ジャパン

Rally Japan

9/3-5

### ついに日本初開催! 北海道の大地で世界が闘う。

開催4年目にしてWRCに昇格するラリー・ジャパンは、北海道の雄大な原野が舞台。高速ステージからテクニカルな林道まで、トップライスト達の技が存分に発揮される。

[昨年の順位] \*WRC昇格は04年から。 4位 鎌田卓麻(SUBARU)  
優勝 新井敏弘(SUBARU) 5位 D・カールン(スズキ)  
2位 G・アークイル(ミツビシ) 6位 田口盛一(ミツビシ)  
3位 A・クレマー(ミツビシ) 7位 渡部正一(スズキ)  
8位 若下英一(ミツビシ)

[過去の勝者]

02 P・ネーン(SUBARU) 01 石田正史(ミツビシ)  
\*WRC昇格は04年から。

Round

12



第60回

ラリー・GB [イギリス]

Wales Rally GB

9/17-19

### 英王室ともゆかりの深い、 霧深い森の伝統の一戦。

AWDのトラクション性能が問われる、霧深い森のマッディロード(泥濘路)。SUBARUが7勝を挙げる英国伝統のビックイベントは、昨年は最終戦としてソルベルグ初戴冠の場となった。

[昨年の順位] 4位 C・マクレ(シトロエン)  
優勝 P・ソルベルグ(SUBARU) 5位 F・デュバル(フォード)  
2位 S・ロープ(シトロエン) 6位 F・ロウクス(アージュ)  
3位 T・マキネン(SUBARU) 7位 M・ストール(アージュ)  
8位 R・クレスタ(アージュ)

[過去の勝者]

02 P・ソルベルグ(SUBARU) 01 M・グロンホルム(アージュ) 00 R・バーンズ(SUBARU)  
99 R・バーンズ(SUBARU) 98 R・バーンズ(ミツビシ) 97 C・マクレ(SUBARU)  
96 M・ソルベルグ(トヨタ) 95 C・マクレ(SUBARU) 94 C・マクレ(SUBARU)  
93 J・カンクネン(トヨタ) \*96年はWRCイベントではない。

### 風光明媚なエメラルド海岸で 未知のラフロード決戦。

昨年までのサンレモから、22回の歴史を持つコスタ・スメラダ・ラリーも行なわれてきたリゾートと牧場の島サルジニアへ。各チームともデータが少なく、波乱が予想されるグラベルラリーだ。

[昨年の順位]

[過去の勝者]



Round

13

第1回

ラリー・サルジニア [イタリア]

Rallye d'Italia - Sardinia

10/1-3

### 断崖絶壁のコルシカ島が、 サーキットに変わる。

「直線が100m続いたら、そこはコルシカではない」。タイトコーナーが連続する地中海の断崖絶壁でテクニックを競う、ターマックラリー王国フランス伝統の一戦だ。

[昨年の順位] 4位 M・グロンホルム(アージュ)  
優勝 P・ソルベルグ(SUBARU) 5位 C・マクレ(シトロエン)  
2位 C・サインツ(シトロエン) 6位 G・バニツツィ(アージュ)  
3位 F・デュバル(フォード) 8位 R・バーンズ(アージュ)

[過去の勝者]

02 G・バニツツィ(アージュ) 01 J・ペナルスキー(シトロエン) 00 G・バニツツィ(アージュ)  
99 P・パウルスキー(シトロエン) 98 C・マクレ(SUBARU) 97 C・マクレ(SUBARU)  
96 P・パウルスキー(ルノー) 95 D・オリオール(トヨタ) 94 D・オリオール(トヨタ)  
93 F・デルクール(フォード) \*96年はWRCイベントではない。

Round

14



第48回

ツール・ド・コルス [フランス]

Rallye de France - Tour de Corse

10/15-17

PCWRC 併催

### アスファルトが白煙にけむる 高速コーナー。

タイヤから白煙を上げ、路面にブラックマーカーを刻むラリーカーに観客も熱狂。カタルニアの高速ワインディングでは、ターマックラリーならではの迫力を存分に味わえる。

[昨年の順位] 4位 F・デュバル(フォード)  
優勝 G・バニツツィ(アージュ) 5位 P・ソルベルグ(SUBARU)  
2位 S・ロープ(シトロエン) 6位 M・グロンホルム(アージュ)  
3位 M・マルティン(フォード) 7位 C・サインツ(シトロエン)  
8位 T・マキネン(SUBARU)

[過去の勝者]

02 G・バニツツィ(アージュ) 01 D・オリオール(アージュ) 00 C・マクレ(フォード)  
99 P・パウルスキー(シトロエン) 98 D・オリオール(トヨタ) 97 T・マキネン(ミツビシ)  
96 C・マクレ(SUBARU) 95 C・サインツ(SUBARU) 94 E・バートン(トヨタ)  
93 F・デルクール(フォード) \*94年はWRCイベントではない。

Round

15



第40回

ラリー・カタルニア [スペイン]

Rally Catalunya - Rally de Espana

10/29-31

### 滑る高速コースで魅せる マシンコントロール。

最終戦は南半球の躍動、滑りやすい丸い小石におおわれた"ボレーベアリング・ロード"。立ち木に囲まれ凹凸の点在する高速コースを、針の穴を通すようなマシンコントロールで駆けぬける。

[昨年の順位] 4位 C・マクレ(シトロエン)  
優勝 P・ソルベルグ(SUBARU) 5位 C・サインツ(シトロエン)  
2位 S・ロープ(シトロエン) 6位 T・マキネン(SUBARU)  
3位 R・バーンズ(アージュ) 7位 H・ロビンソン(アージュ)  
8位 F・ロウクス(ヒュンダイ)

[過去の勝者]

02 M・グロンホルム(アージュ) 01 M・グロンホルム(アージュ) 00 M・グロンホルム(アージュ)  
99 R・バーンズ(SUBARU) 98 T・マキネン(ミツビシ) 97 C・マクレ(SUBARU)  
96 T・マキネン(ミツビシ) 95 C・サインツ(ミツビシ) 94 C・マクレ(SUBARU)  
93 J・カンクネン(トヨタ) \*96年はWRCイベントではない。

Round

16



第17回

ラリー・オーストラリア

Telstra Rally Australia

11/12-14

PCWRC 併催



# SUBARU WRC challenge 1990-2003 RESULT

SUBARUが本格参戦した1990年からの全ラリーの最高順位とドライバーを記載しています。

## 1990 マニファクチャラーズ 4位

R3 サファリ	8位	ハトリック・ジル
R5 アクロポリス	8位	イアン・ダンカン
R6 ニュージーランド	5位	ボッサム・ボーン
R8 1000湖	4位	マルク・アレン
R9 オーストラリア	4位	ボッサム・ボーン
R10 サンレモ	ノーポイント	
R12 RAC	ノーポイント	

## 1991 マニファクチャラーズ 6位

R2 スウェディッシュ	3位	マルク・アレン
R3 ボルトガル	5位	マルク・アレン
R4 サファリ	6位	イアン・ダンカン
R5 ツールド・コルス	9位	フランソワ・シャトリオ
R6 アクロポリス	ノーポイント	
R7 ニュージーランド	4位	マルク・アレン
R9 1000湖	ノーポイント	
R10 オーストラリア	4位	マルク・アレン
R14 RAC	5位	アリ・バタネン

## 1992 マニファクチャラーズ 4位

R2 スウェディッシュ	2位	コリン・マクレー
R4 サファリ	8位	ハトリック・ジル
R6 アクロポリス	4位	コリン・マクレー
R7 ニュージーランド	ノーポイント	
R9 1000湖	4位	アリ・バタネン
R10 オーストラリア	6位	ボッサム・ボーン
R14 RAC	2位	アリ・バタネン

## 1993 マニファクチャラーズ 4位

R2 スウェディッシュ	3位	コリン・マクレー
R3 ボルトガル	4位	マルク・アレン
R4 サファリ	ノーポイント	
R5 ツールド・コルス	5位	コリン・マクレー
R6 アクロポリス	ノーポイント	
R8 ニュージーランド	優勝 V1	コリン・マクレー
R9 1000湖	2位	アリ・バタネン
R10 オーストラリア	2位	アリ・バタネン
R11 サンレモ	5位	ピエロ・リアッティ
R13 RAC	5位	アリ・バタネン

## 1994 マニファクチャラーズ 2位

R1 モンテカルロ	3位	カルロス・サインツ
R2 ボルトガル	4位	カルロス・サインツ
R3 サファリ	4位	ハトリック・ジル
R4 ツールド・コルス	2位	カルロス・サインツ
R5 アクロポリス	優勝 V2	カルロス・サインツ
R6 アルゼンチン	2位	カルロス・サインツ
R7 ニュージーランド	優勝 V3	コリン・マクレー
R8 1000湖	3位	カルロス・サインツ
R9 サンレモ	2位	カルロス・サインツ
R10 RAC	優勝 V4	コリン・マクレー

## 1995 マニファクチャラーズ・チャンピオン

R1 モンテカルロ	優勝 V5	カルロス・サインツ
R2 スウェディッシュ	ノーポイント	
R3 ボルトガル	優勝 V6	カルロス・サインツ
R4 ツールド・コルス	4位	カルロス・サインツ
R5 ニュージーランド	優勝 V7	コリン・マクレー
R6 オーストラリア	2位	コリン・マクレー
R7 カタルニア	優勝 V8	カルロス・サインツ
R8 RAC	優勝 V9	コリン・マクレー

## 1996 マニファクチャラーズ・チャンピオン

R1 スウェディッシュ	3位	コリン・マクレー
R2 サファリ	2位	ケネス・エリクソン
R3 インドネシア	2位	ピエロ・リアッティ
R4 アクロポリス	優勝 V10	コリン・マクレー
R5 アルゼンチン	3位	ケネス・エリクソン
R6 1000湖	5位	ケネス・エリクソン
R7 オーストラリア	2位	ケネス・エリクソン
R8 サンレモ	優勝 V11	コリン・マクレー
R9 カタルニア	優勝 V12	コリン・マクレー

## 1997 マニファクチャラーズ・チャンピオン

R1 モンテカルロ	優勝 V13	ピエロ・リアッティ
R2 スウェディッシュ	優勝 V14	ケネス・エリクソン
R3 サファリ	優勝 V15	コリン・マクレー
R4 ボルトガル	ノーポイント	
R5 カタルニア	2位	ピエロ・リアッティ
R6 ツールド・コルス	優勝 V16	コリン・マクレー
R7 アルゼンチン	2位	コリン・マクレー
R8 アクロポリス	ノーポイント	
R9 ニュージーランド	優勝 V17	ケネス・エリクソン
R10 フィンランド	ノーポイント	
R11 インドネシア	3位	ケネス・エリクソン
R12 サンレモ	優勝 V18	コリン・マクレー
R13 オーストラリア	優勝 V19	コリン・マクレー
R14 RAC	優勝 V20	コリン・マクレー

## 1998 マニファクチャラーズ 3位

R1 モンテカルロ	3位	コリン・マクレー
R2 スウェディッシュ	4位	ケネス・エリクソン
R3 サファリ	ノーポイント	
R4 ボルトガル	優勝 V21	コリン・マクレー
R5 カタルニア	ノーポイント	
R6 ツールド・コルス	優勝 V22	コリン・マクレー
R7 アルゼンチン	5位	コリン・マクレー
R8 アクロポリス	優勝 V23	コリン・マクレー
R9 ニュージーランド	5位	コリン・マクレー
R10 フィンランド	ノーポイント	
R11 サンレモ	2位	ピエロ・リアッティ
R12 オーストラリア	4位	コリン・マクレー
R13 グレートブリテン	ノーポイント	

## 1999 マニファクチャラーズ 2位

R1 モンテカルロ	2位	ユハ・カンクネン
R2 スウェディッシュ	5位	リチャード・バーンズ
R3 サファリ	ノーポイント	
R4 ボルトガル	4位	リチャード・バーンズ
R5 カタルニア	5位	リチャード・バーンズ
R6 ツールド・コルス	7位	リチャード・バーンズ
R7 アルゼンチン	優勝 V24	ユハ・カンクネン
R8 アクロポリス	優勝 V25	リチャード・バーンズ
R9 ニュージーランド	2位	ユハ・カンクネン
R10 フィンランド	優勝 V26	ユハ・カンクネン
R11 チェイナ	2位	リチャード・バーンズ
R12 サンレモ	6位	ユハ・カンクネン
R13 オーストラリア	優勝 V27	リチャード・バーンズ
R14 グレートブリテン	優勝 V28	リチャード・バーンズ

## 2000 マニファクチャラーズ 3位

R1 モンテカルロ	3位	ユハ・カンクネン
R2 スウェディッシュ	5位	リチャード・バーンズ
R3 サファリ	優勝 V29	リチャード・バーンズ
R4 ボルトガル	優勝 V30	リチャード・バーンズ
R5 カタルニア	2位	リチャード・バーンズ
R6 アルゼンチン	優勝 V31	リチャード・バーンズ
R7 アクロポリス	3位	ユハ・カンクネン
R8 ニュージーランド	6位	ボッサム・ボーン
R9 フィンランド	8位	ユハ・カンクネン
R10 キプロス	4位	リチャード・バーンズ
R11 ツールド・コルス	7位	リチャード・バーンズ
R12 イタリア	4位	シモン・ジャン・ジョセフ
R13 オーストラリア	2位	リチャード・バーンズ
R14 グレートブリテン	優勝 V32	リチャード・バーンズ

## 2001 マニファクチャラーズ 4位

R1 モンテカルロ	ノーポイント	
R2 スウェディッシュ	6位	ベター・ソルベルグ
R3 ボルトガル	4位	リチャード・バーンズ
R4 カタルニア	7位	リチャード・バーンズ
R5 アルゼンチン	2位	リチャード・バーンズ
R6 キプロス	2位	リチャード・バーンズ
R7 アクロポリス	2位	ベター・ソルベルグ
R8 サファリ	ノーポイント	
R9 フィンランド	2位	リチャード・バーンズ
R10 ニュージーランド	優勝 V33	リチャード・バーンズ
R11 サンレモ	9位	ベター・ソルベルグ
R12 ツールド・コルス	4位	リチャード・バーンズ
R13 オーストラリア	2位	リチャード・バーンズ
R14 グレートブリテン	3位	リチャード・バーンズ

## 2002 マニファクチャラーズ 3位

R1 モンテカルロ	優勝 V34	トミ・マキネン
R2 スウェディッシュ	ノーポイント	
R3 ツールド・コルス	5位	ベター・ソルベルグ
R4 カタルニア	5位	ベター・ソルベルグ
R5 キプロス	3位	トミ・マキネン
R6 アルゼンチン	2位	ベター・ソルベルグ
R7 アクロポリス	5位	ベター・ソルベルグ
R8 サファリ	ノーポイント	
R9 フィンランド	3位	ベター・ソルベルグ
R10 ドイツ	7位	トミ・マキネン
R11 サンレモ	3位	ベター・ソルベルグ
R12 ニュージーランド	3位	トミ・マキネン
R13 オーストラリア	3位	ベター・ソルベルグ
R14 グレートブリテン	優勝 V35	ベター・ソルベルグ

## 2003 マニファクチャラーズ 3位

R1 モンテカルロ	ノーポイント	
R2 スウェディッシュ	2位	トミ・マキネン
R3 トルコ	8位	トミ・マキネン
R4 ニュージーランド	3位	ベター・ソルベルグ
R5 アルゼンチン	5位	ベター・ソルベルグ
R6 アクロポリス	5位	ベター・ソルベルグ
R7 キプロス	優勝 V36	ベター・ソルベルグ
R8 ドイツ	8位	ベター・ソルベルグ
R9 フィンランド	2位	ベター・ソルベルグ
R10 オーストラリア	優勝 V37	ベター・ソルベルグ
R11 サンレモ	10位	トミ・マキネン
R12 ツールド・コルス	優勝 V38	ベター・ソルベルグ
R13 カタルニア	5位	ベター・ソルベルグ
R14 グレートブリテン	優勝 V39	ベター・ソルベルグ

### SUBARUのWRC戦績解説

SUBARUは1980年、レオーネで離間サファリにデビュー。これは、今や常識となったタイプのAWDラリーカーがWRCに初登場した歴史的瞬間でもあった。90年からはSUBARUワールドラリーチームとしてレガシィでワークス参戦を開始し、93年ニュージーランドでWRC初勝利。次戦1000湖からインプレッサを投入し、94年からフル参戦を開始する。93年の初勝利から一度も未勝利のシーズンを経験することなく、現在通算30勝、95、96、97年と日本車初のマニファクチャラーズタイトル3連覇を果たし、95、01、03年と3人の新ドライバーズ・チャンピオンを生み出した。96年以前のグループAと97年以降のWRカーの両方でタイトルを獲得し、合計8人の多彩なトップ・ドライバーズに勝利をもたらしている点も見逃せない。



2004年、  
日本のモータースポーツの歴史が変わる。



ラリーのワールドカップ日本初開催!“世界”の走りを目撃する、2004WRC「ラリー・ジャパン」

# WRC in JAPAN

F1、インディ、2輪世界GPといったワールドクラスのモータースポーツのなかで、唯一、日本で開催された事のない最後のメジャー“WRC”が、ついに北海道に上陸する。日本悲願のWRC初開催となる「ラリー・ジャパン(ラリー北海道)」は、2001年に国際格式ラリーとして第1回が開催され、翌2002年には日本初のアジア・パシフィックラリー選手権に昇格。そして4年目を迎える今年、WRC「世界ラリー選手権」の第11戦として、帯広をホストタウンに十勝の雄大な原野で開催される。日本で初めて行なわれるラリーの世界選手権に、SUBARUは新チャンピオンとともに参戦。世界の走りと安全を競うワールドラリーカーを意のままに操り、走る喜びを体現するWRCラリー리스트達。かつて味わったことのないラリーの感動を、雄大な北の大地で体験してほしい。

PHOTO: 2003ラリー北海道 インプレッサWRX STi (新井雄弘)

## 世界の道に根ざしたクルマ文化、ラリーという名の“祭り”。

1894年にパリで最古の自動車競技が行われ、1911年には現在WRCの開幕戦であるラリー・モンテカルロ開催。20世紀初頭からの歴史を持つラリーは、モータースポーツの原点であり、世界の道に根ざしたクルマ文化でもあります。その語源は「Rally = 再び集まる」。主君の元に馳せ参する中世ヨーロッパの騎士達が起源だとも言われています。海外のラリーでは、自分の家の前を走るラリーカーを、お年寄りから子供たちまで家族で応援する光景が見られます。半世紀以上に及ぶイベントも多いラリーは、その国に根ざした伝統の“祭り”でもあるのです。そして今年、日本初のWRC「ラリー・ジャパン」開催。今までのモータースポーツイベントとは違う“祭り”が、北海道の大地に根付いた時、日本は初めて本物のクルマ文化を知るのかもしれない。



SUBARUブルーのソルベルグ応援団。お気に入りのドライバーをチームジャケットまで応援するの、伝統的なラリーの楽しみ方。ファン同士の出会いの場でもある。



天下の公道で行なわれるラリーには、各国の名物料理が味わえる露店も多い。お国がらが現れる風景だが、北海道では何が食べられるのだろうか?



街角のカフェに陣どってラリーカーを応援。人々の生活に溶けこんだラリーならではの風景。北海道のロードセクションでも、こんな素敵なティータイムが過ごせるかもしれない。

## 2004 FIA World Rally Championship Round 11 "RALLY JAPAN" in HOKKAIDO

2004 FIA世界ラリー選手権 第11戦 ラリー・ジャパン

ラリースケジュール(予定)

9/2 (Thu) シェイクダウン セレモニアルスタート

9/3 (Fri) Leg1

9/4 (Sat) Leg2

9/5 (Sun) Leg3 ラリーフィニッシュ

ホストタウン：帯広

ヘッドクォーター：十勝プラザ

オーガナイザー：AG.メンバーズスポーツクラブ北海道(JAF公認クラブ)

ラリー・ジャパン(ラリー北海道)オフィシャルサイト  
[www.rally-hokkaido.com](http://www.rally-hokkaido.com)

\*データは2004年1月1日時点。ラリーの日程、内容、各チームの参戦体制等は変更になる場合があります。



ラリーで、そしてレースで。市販車ベースのモータースポーツが、SUBARUの走りを鍛えています。

あくまで自動車メーカーとして、市販車ベースのモータースポーツにこだわるSUBARU。そのチャレンジは、ラリーだけではなくサーキットにも及びます。日本唯一の本格耐久シリーズ「スーパー耐久」、世界のGTカーが集結し国際的にも注目される「全日本GT選手権」。日進月歩のモータースポーツの極限の闘いの中で、進化していくSUBARUの走りを、ぜひその目で確かめてください。

エンジンは、ラリーだけではなくサーキットにも及びます。日本唯一の本格耐久シリーズ「スーパー耐久」、世界のGTカーが集結し国際的にも注目される「全日本GT選手権」。日進月歩のモータースポーツの極限の闘いの中で、進化していくSUBARUの走りを、ぜひその目で確かめてください。

## Super Taikyu

スーパー耐久シリーズ



PHOTO: FUJITSUBOインプレッサ(吉田勇博/清水和夫) 2003年型マシン

市販車に近いマシンで最大24時間走る。日本唯一の本格耐久シリーズ“Super Taikyu”は、ラリーとは違った意味で信頼性、耐久性が試される貴重なテストフィールドでもある。昨年は、強敵ランサーが大挙参戦する激戦区クラス2に、ディフェンディング・チャンピオンとして臨んだインプレッサ。ドライバーが「ドライでも雨でも同じフィーリングで走れる」と評するSYMMETRICAL AWDの優れた重量バランスとトラクション性能にこわえ、等長等爆エキゾーストシステムによる大幅なトルク向上などベース市販車の進化を活かし、ボールポジション5回、優勝3回で最多得点を記録。有効ポイント制の壁に阻まれ連覇は逃したが、全戦で安定して上位入賞を果たし、ピットストップも減らせる好燃費や軽量ボディなど市販車につながる優れた性能を実証した。今年はタイトル奪還を目指し、SYMMETRICAL AWDの可能性を広げる“S耐”へのチャレンジは続く。

### 2004 Super Taikyu Series

第1戦 ツインリンクもてぎ 3/20-21	第5戦 十勝スピードウェイ 8/6-8
第2戦 仙台ハイランドレースウェイ 4/24-25	第6戦 TIサーキット英田 9/11-12
第3戦 鈴鹿サーキット 5/15-16	第7戦 スポーツランドSUGO 10/2-3
第4戦 CP-MINEサーキット 6/26-27	第8戦 ツインリンクもてぎ 11/13-14

#### スーパー耐久レギュレーション概要

改造範囲や使用タイヤが厳しく制限されるスーパー耐久は、排気量や駆動方式により5つにクラスに分けられたマシンが混走し、クラスごとに順位を争います。中でも注目を集めるのは、インプレッサとランサーが争うクラス2。レースでは2名のドライバーが交代で運転しますが、ドライバー予選で公式予選通過タイムをクリアできなかったドライバーは出場できません。続いてボールポジションを争うグリッド予選が行われます。レースは、決められた時間内(4~24時間)でサーキットを何周するかを競う耐久形式のもの、決められた距離(400~500km)を何時間で走りきるかを競うスプリントレースの形式を取り入れたものがあります。決勝レースの順位に応じて、クラスごとに1~10位のチームに20、15、12、10、8、6、4、3、2、1点が与えられますが、十勝24時間レースのような長丁場ではポイントが割増される事もあります。このポイントの年間合計でシリーズチャンピオンが決定。ただし最もポイントの低かった1戦分が除外される有効ポイント制のため、全戦で安定して高成績を挙げたチームに不利な面もあります。

スーパー耐久オフィシャルサイト <http://www.so-net.net.jp/s-taikyu/>

## JGTC

JGTC [全日本GT選手権]



PHOTO: クラスコスバルインプレッサ(小林直雄/沼川達也) 2003年型マシン

国産ハイパフォーマンス車からボルシェ、フェラーリ、ランボルギーニまで。世界の自動車メーカーを代表するGTカーが参戦。昨年から国際格式レースとなった全日本GT選手権は、F1日本GPに次ぐ観客動員数を誇り国際的にも注目されるシリーズだ。GT300クラスで大きな話題となったインプレッサは、全高の低い水平対向エンジンのメリットを活かした超低重心な車体にくわえ、限りなく50:50に近い前後重量配分を実現。実験的な車体レイアウトで注目を集めている。昨年は好成績が期待されたマレーシアでのレースが中止になるなどの不運もあり、一昨年の最上位2位には及ばなかった。今年は初勝利を目指し、国産唯一の水平対向エンジンのアドバンテージとともに“GT”インプレッサは闘い続ける。

### 2004 All Japan GT Car Championship

第1戦 TIサーキット英田 4/3-4	第5戦 ツインリンクもてぎ 9/4-5
第2戦 スポーツランドSUGO 5/22-23	第6戦 オートポリス 10/30-31
第3戦 マレーシア・セパンサーキット 6/18-19	第7戦 鈴鹿サーキット 11/20-21
第4戦 十勝スピードウェイ 7/17-18	

#### JGTCレギュレーション概要

フォーミュラレースより若干長い250~500kmの距離で争われるJGTC。最大出力はリストラクター(吸気制限装置)で厳しく制限されるとともに、最大出力に応じてGT500とGT300の2クラスに分けられ、インプレッサは約300馬力のGT300に参戦。レースでは2つのクラスが混走し、クラスごとに順位を競います。ドライバーは2名が交代して運転しますが、レース中一度は給油とドライバー交代のためにピットインします。公式予選は2回。予選の成績順にオフィシャルカーの先導で隊列を組んでサーキットを周回しながら、シグナル点灯後にコントロールラインを越えてからバトルを開始するローリングスタートで決勝レースが始まります。決勝レースの順位に応じて、クラスごとに1~10位のチームに20、15、12、10、8、6、4、3、2、1点が与えられ、予選1~3位と決勝ラップタイム1~3位までのチームにも1ポイントを加算。上位に入賞したマシンには、イコロンコンディションを保つために次戦から10~50kgのウェイトハンデが積まれ、シーズン終盤まで自然のタイトル争いが続きます。

JGTCオフィシャルサイト <http://www.jgtc.net/>